

《タンクレーディ》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニー協会紀要）第18号（2000年12月発行）の拙稿『ロッシニー
全作品事典（13）《タンクレーディ》』。その増補改訂版をHPに掲載します。

（2013年6月改訂／2014年2月再改訂）

I-10 タンクレーディ *Tancredi*

劇区分 2幕のメロドラマ・エローイコ（melo-dramma eroico in due atti）

註：melo-dramma の分綴は初版台本に準拠。

台本 ガエターノ・ロッシ（Gaetano Rossi,1774-1855）

第1幕：全13景、第2幕：全21景、イタリア語

原作 ヴォルテール（Voltaire [フランソワ=マリー・アルエ François-Marie Arouet],1694-1778）の5幕悲劇『タンク
レード（*Tancredi*）』（1759年春執筆、1760年9月3日パリのコメディ・フランセーズ初演。ヴォルテールの素材
とロッシ以前のオペラ台本については解説参照）。

作曲年 1812年下旬（不明）～1813年2月前半（初演シーズン中の改訂を含む。フェッラーラ版は同年3月）

初演 1813年2月6日（土曜日）、ヴェネツィア、フェニーチェ劇場（Teatro La Fenice）註：初版台本の記載は
Gran Teatro La Fenice。

人物 ①アルジーリオ Argirio（テノール、c'-d''）……シラクーザの長、アメナイデの父

②タンクレーディ Tancredi（コントラルト、g-g'）……亡命中の騎士

③オルバツァーノ Orbazzano（バス、A b -e'）……アルジーリオと対立する一族の長

④アメナイデ Amenaide（ソプラノ、c'-c#''）……アルジーリオの娘

⑤イザウラ Isaura（メゾソプラノまたはコントラルト、g-e''）……アメナイデの友人

註：差し替えアリア N.9a の音域は c'-g'。

⑥ロジエーロ Ruggiero（ソプラノまたはメゾソプラノ、c#'-b b''）……タンクレーディの腹心

註：テノール版の追加アリア N.15a の音域は d'-e''。

他に、貴族、騎士、従者、民衆、サラセン人たち（以上、男声合唱）、兵士、小姓、衛兵、民衆、侍女、
サラセン人たち（以上、エキストラ）

初演者 ①ピエートロ・トドラン（Pietro Todran,?-? 初演時のプリモ・テノール）

②アデライデ・マラノッテ=モンテレゾル（Adelaide Malanotte-Montrésor,1785-1832 初演時のプリモ・ソプラ
ノ・アッソルト）註：当時は女性歌手の男装主役を「プリモ・ソプラノ」とすることがあった。

③ルチアーノ・ビアンキ（Luciano Bianchi,1776-1852 初演時のプリモ・バス）

④エリザベッタ・マンフレディーニ=グアルマーニ（Elisabetta Manfredini-Guarmani,1780-? 初演時のプリ
マ・ドンナ・アッソルター）

⑤テレザ・マルケージ（Teresa Marchesi,?-? 初演時のセコンダ・ドンナ）

⑥カロリーナ・シヴェッリ（Carolina Sivelli,?-? 初演時のセコンド・ソプラノ）

管弦楽 2フルート／1ピッコロ、2オーボエ、1ホルン・イングレーゼ（イングリッシュ・ホルン）、2クラリネット、
2ファゴット、2ホルン、2トランペット、ティンパニ、バンダ・トゥルカ*、弦楽5部、レチタティ
ーヴォ・セッコ伴奏楽器

* 楽譜は現存せず。

演奏時間 序曲：6分 第1幕：60～70分 第2幕：85～90分 註：悲劇的フィナーレ版による演奏時間の目安。

自筆楽譜 スカラ座博物館、ミラーノ

初版楽譜 Pietro Mechetti,Wien,1815-17.（ピアノ伴奏譜）

註：やや遅れて Breitkopf und Härtel,Leipzig,1816-17.と B.Schott,Mainz,1817.も出版。これに関する全集版（下
記）校註書の記載は、その後ロッシニー財団によって修正されている（Fondo Lord St. Davids 目録）。

Troupenas,Paris,1827.（総譜初版 [フランス語改作版]）

全集版 I/10 (Philip Gossett 校訂,Fondazione Rossini,Pesaro,1984.)

楽曲構成（全集版に基づく）

序曲 [Sinfonia] : ニ長調、4/4 拍子、アンダンテ・マルカート～アレグロ

第1幕

- N.1 導入曲〈平和、名誉、忠誠、愛 Pace, onore, fede, amore〉（イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ、合唱）
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈さて、勇敢なる騎士たちよ Ed ecco, o prodi Cavalier〉（イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ）
- N.2 合唱〈そよ風は心地よく、穏やかに吹き Più dolci e placide〉とアメナイーデのカヴァティーナ〈なんと甘く、私の心に染み渡るのでしょう Come dolce all'anima mia〉（アメナイーデ、合唱）
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈すでに決まったことなのだ、娘よ È già deciso, o figlia〉（アメナイーデ、イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ）
- N.3 レチタティーヴォ〈おお、祖国よ！ Oh patria!〉とタンクレーディのカヴァティーナ〈君はわが心を燃え上がらせ Tu che accendi questo core〉（タンクレーディ）
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ここがアメナイーデの住処 D'Amenaide ecco il soggiorno〉（アメナイーデ、ロジエーロ、タンクレーディ、アルジャーリオ）
- N.4 レチタティーヴォ〈死ですって！ La morte!〉とアルジャーリオのアリア〈私の娘であることを考えよ Pensa che sei mia figlia〉（アメナイーデ、アルジャーリオ）
— アリアの後のレチタティーヴォ〈なんとということをしてしまったのでしょ！ 無分別にも！ Che feci! Incauta!〉（アメナイーデ、タンクレーディ）
- N.5 レチタティーヴォ〈ああ、選んでおしまいです Oh qual scegliești〉、アメナイーデとタンクレーディの二重唱〈あなたを取り巻く大気は L'aura che intorno spiri〉（アメナイーデ、タンクレーディ）
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈なんとということ！ ああ、裏切りだ！ Che intesi! oh tradimento!〉（ロジエーロ）
- N.6 合唱〈愛よ、降りてこい Amori scendente〉（合唱）
— 合唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、歌声が！ ああ、誓約だ！ Oh canti! oh voti!〉（アメナイーデ、ロジエーロ、タンクレーディ、イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ）
- N.7 管弦楽伴奏レチタティーヴォ〈誰によって？ なぜだ… Da chi? perché...〉と第1幕フィナーレ〈神よ！ なんてことだ！ Ciel! che intesi!〉（アメナイーデ、ロジエーロ、タンクレーディ、イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ、合唱）

第2幕

- レチタティーヴォ〈見たか？／見ました Vedesti? Vidi〉（イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ）
- N.8 レチタティーヴォ〈ああ、神よ…なんて酷い！ Oh Dio!...Crudel!〉とアルジャーリオのアリア〈ああ！ 署名しようとしてもできぬ Ah! Segnar invano io tento〉（イザウラ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ、合唱）
— アリアの後のレチタティーヴォ〈勝ったのね、喜びなさい、人でなし！ Trionfa, esulta, barbaro!〉（イザウラ、オルパッツァーノ）
- N.9 イザウラのアリア〈みじめな者たちを力づける Tu che i miseri conforti〉（イザウラ）
- N.10 シェーナ〈私の不幸な人生の Di mia vita infelice〉とアメナイーデのカヴァティーナ〈いいえ、死というものは No, che il morir non è〉（アメナイーデ）
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈時は過ぎ去った Di già l'ora è trascorsa〉（アメナイーデ、タンクレーディ、アルジャーリオ、オルパッツァーノ）
- N.11 レチタティーヴォ〈抱擁してください、アルジャーリオ M'abbraccia, Argirio〉、タンクレーディとアルジャーリオの二重唱〈ああ、もしも私の不幸を Ah se de'mali miei〉（タンクレーディ、アルジャーリオ）
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈どこ…どこにいます？ Ov'è... dov'è?〉（アメナイーデ、イザウラ、アルジャーリオ）
- N.12 レチタティーヴォ〈偉大な神様！ ああ、守ってあげてください Gran Dio! Deh, tu proteggi〉とアメナイーデのアリア〈恭しく崇める正義の神様 Giusto Dio che umile adoro〉（アメナイーデ、合唱）
— アリアの後のレチタティーヴォ〈なんと多くの出来事が Quante vicende omai〉（イザウラ）
- N.13 合唱〈喝采しよう、人々よ Plaudite, o popoli〉（タンクレーディ、合唱）
— 合唱の後のレチタティーヴォ〈私の軍旗を集めてくれ Le insegne mie raccogli〉（アメナイーデ、ロジエーロ、タンクレーディ）
- N.14 レチタティーヴォ〈（なんとという出会いだ！ Fiero incontro!）〉、アメナイーデとタンクレーディの二重唱

- 〈ほっといてくれ：聞く耳は持たぬ *Lasciami: non t'ascolto*〉 (タンクレーディ、アメナイーデ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ 〈不幸なタンクレーディ！ *Infelice Tancredi!*〉 (ロッジェーロ、イザウラ)
- N.15 ロッジェーロのアリア 〈ついに微笑みながら戻ってきた *Torni alfin ridente, e bella*〉 (ロッジェーロ)
- N.16 タンクレーディの大シエーナ [Gran Scena]
- 16-i シエーナ 〈私はどこにいるのだ？ *Dove son io?*〉 とタンクレーディのカヴァティーナ 〈ああ！ どうしても忘れられない *Ah! che scordar non so*〉 (タンクレーディ)
- 16-ii サラセン人たちの合唱 〈恐怖が町を支配する *Regna il terror nella Città*〉 (合唱)
- 16-iii 合唱の後のレチタティーヴォ 〈私はサラセン人たちの真っ只中にいるのか？ *Fra Saraceni io dunque son?*〉 (アメナイーデ、タンクレーディ、アルジーリオ)
- 16-iv 行進曲 〈あの音は？ *Qual suon?*〉 とタンクレーディのアリア 〈さあ、何と言う？ どう答えるのだ？ *Or che dici? or che rispondi?*〉 (タンクレーディ、合唱)
- 大シエーナの後のレチタティーヴォ 〈ああ！ 彼は破滅してしまいます *Ah! ch'ei si perde!*〉 (アメナイーデ、タンクレーディ、イザウラ、アルジーリオ)
- N.17 第2幕フィナーレ 〈この甘美なときめきの中 *Fra quai soavi palpiti*〉 (アメナイーデ、タンクレーディ、イザウラ、アルジーリオ、合唱)

以下、フェットラー改訂版の悲劇的フィナーレ (全集版 Appendice III より。N.10a を除く)

- N.16-iiia 騎士たちの合唱 〈恐怖が町を支配する *Regna il terror nella Città*〉 (合唱)
- N.16-iiiaa レチタティーヴォ 〈ここにタンクレーディがいるわ *Ecco amici Tancredi*〉 とタンクレーディのロンド 〈なぜ平安を乱すのか *Perché turbar la calma*〉 (アメナイーデ、タンクレーディ、アルジーリオ、合唱)
- N.17a 合唱 〈勇者が死ぬ *Muore il prode*〉 (合唱)
- 合唱の後のレチタティーヴォ 〈野蛮人たち！ でも、後悔してもだめね… *Barbari! È vano ogni rimorso...*〉 (アメナイーデ、タンクレーディ、アルジーリオ)
- N.18a レチタティーヴォ 〈ああ、神よ… *Oh Dio...*〉 とタンクレーディのカヴァティーナ・フィナーレ 〈アメナイーデ…持ち続けておくれ、お前の… *Amenaide...serbami tua fé...*〉 (タンクレーディ)

物語 1005年のシラクァザ (ヴォルテールの原作に由来)

【第1幕】

アルジーリオの宮殿の回廊。騎士とその従者たちが集って党派抗争の終結と友情の復活を祝い、祖国への忠誠を誓う。アルジーリオはオルバツァーノとの反目を解消し、一同結束してサラセン軍と戦うよう呼びかける。亡命中のタンクレーディを裏切り者とするアルジーリオは、娘アメナイーデをオルバツァーノに嫁がせると約束する (N.1 導入曲)。従者を伴いアメナイーデが現れる。彼女は愛と調和を讃える合唱に幸せをかみしめるが (N.2 合唱とアメナイーデのカヴァティーナ)、父からオルバツァーノとの結婚を命じられてしまう。

海岸を望む宮殿の庭。一艘の帆掛け舟が接岸し、タンクレーディと部下たちが下船する。タンクレーディは祖国への無事帰還を感謝し、恋人との再会を思い描いて喜びと不安にひたる (N.3 レチタティーヴォとタンクレーディのカヴァティーナ)。そこにアメナイーデが父アルジーリオとやってくるので、彼は隠れて様子をうかがう。アルジーリオは娘にタンクレーディのメッシーナ到着を告げ、シラクァザに戻れば死刑にすると言い渡し、改めてオルバツァーノとの結婚を強要してその場を去る (N.4 レチタティーヴォとアルジーリオのアリア)。タンクレーディが姿を見せるとアメナイーデは驚き、彼の身を案じて遠くに逃れるよう求める。タンクレーディはアメナイーデの真意を計りかね、苦しむ (N.5 レチタティーヴォ、アメナイーデとタンクレーディの二重唱)。

城壁の近くの広場。貴族と戦士たちがオルバツァーノとアメナイーデの婚礼を祝っている (N.6 合唱)。その歌声を耳にしたタンクレーディは、恋人に裏切られたと思い込む。やがて人々が集まると、彼は身分を隠して義勇軍への参加を申し出る。タンクレーディの姿を認めたアメナイーデは、これに力を得て父に結婚式を取り止めを願うが、怒りをかってしまう。そこにオルバツァーノがアメナイーデの手紙を持って現れる。宛名のないその手紙は彼女がタンクレーディに渡すつもりで書いたものだが、これが朗読されると皆はアメナイーデがサラセンの将軍ソラミーロと内通したと誤解する。祖国を裏切ったと見なされたアメナイーデは逮捕され、父から死刑を言い渡される。ことのみなりゆき一同戦慄する (N.7 管弦楽伴奏レチタティーヴォと第1幕フィナーレ)。

【第2幕】

アルジーリオの城内の回廊。アメナイーデの裏切りに怒りが収まらぬオルバツァーノは、アルジーリオに元老院の下した死刑判決への署名を迫る。慈悲を乞うイザウラ。アルジーリオは国王の義務と娘への愛の狭間で懊悩

しながらも、最後に意を決して署名する (N.8 レチタティーヴォとアルジーリオのアリア)。イザウラはオルバツァアーノを非難し、アメナイーデのために祈る (N.9 イザウラのアリア)。

舞台は牢獄に変わり、アメナイーデが鎖に繋がれている。死を覚悟した彼女は、いつかタンクレーディが自分の無実を知り、後悔の涙を流すことを願う (N.10 シェーナとアメナイーデのカヴァティーナ)。王とオルバツァアーノ、騎士たちが入ってくる。王は父としての愛情につき動かされて娘を許すが、オルバツァアーノは彼女を裏切り者と非難し、「罪ある女を護る騎士はひとりもない」と言い捨てる。するとタンクレーディが現れ、オルバツァアーノに決闘を申し込む。相手が誰か気づかぬままオルバツァアーノはこれを受け入れ、アメナイーデの鎖を解かせて連行させると立ち去る。王は勇士の出現を喜び、タンクレーディは恋人の誠実さを疑いつつも命を捧げる決意を述べる。合図のトランペットが鳴り、王に励まされたタンクレーディは決闘の場に向かう (N.11 レチタティーヴォ、タンクレーディとアルジーリオの二重唱)。

イザウラ、続いてアメナイーデが来て二人で決闘のなりゆきを心配していると、戻ってきたアルジーリオが闘いの模様を語る。アメナイーデがタンクレーディの無事を神に祈っていると、遠くから勇者を称える群集の声が聞こえる。タンクレーディの勝利を知り、不安が喜びに変わる (N.12 レチタティーヴォとアメナイーデのアリア)。

シラクーザの大広場。人々の歓呼を浴びるタンクレーディ (N.13 合唱)。だが、心晴れぬ彼は祖国を去る決意をする。アメナイーデが来て誤解を解こうとするが、タンクレーディは耳を貸さず、二人は理解し合えぬまま苦しむ (N.14 レチタティーヴォ、アメナイーデとタンクレーディの二重唱)。タンクレーディに付き従うことを拒まれたロジエロに対し、イザウラはアメナイーデの潔白を説明する。驚いたロジエロは、それが本当なら主人も平安を取り戻せる、と喜ぶ (N.15 ロジエロのアリア)。

山間の崖下。アメナイーデを忘れられないタンクレーディが独り苦しんでいる (N.16-i シェーナとタンクレーディのカヴァティーナ)。サラセンの兵士たちの勝利を願う歌声が聞こえてくる (N.16-ii サラセン人たちの合唱)。アメナイーデとアルジーリオが来てタンクレーディの誤解を必死に解こうとするが、彼は心を開かない (N.16-iii レチタティーヴォ)。アメナイーデが足元に身を投げ出すのを見て、ようやくタンクレーディも心を動かされるが、サラセン軍が間近に迫り、彼は騎士たちを率いて戦地へと向かう (N.16-iv 行進曲とタンクレーディのアリア)。やがて勝利して戻ったタンクレーディは、打ち倒した敵将の口からアメナイーデの潔白を告げられており、一同喜びのうちに和解する (N.17 第2幕フィナーレ)。

—— [以下、フェッラーラ版の悲劇的フィナーレ]

騎士たちがタンクレーディを指揮官に求め、その姿を探している (N.16-iiia.騎士たちの合唱)。アメナイーデとアルジーリオは彼を見つけるが、タンクレーディは心を乱されることを望まず、彼女を拒絶して戦地に赴く (N.16-iiiaa レチタティーヴォとタンクレーディのロンド)。その場に残されたアメナイーデの耳に、激しい戦闘の音が聞こえる。やがて戻ってきたアルジーリオは、タンクレーディが敵に刺されて瀕死の重傷を負ったと告げる。「勇者が死ぬ」との悲痛な歌声 (N.17a 合唱) と共に、タンクレーディが運ばれてくる。アルジーリオから「娘はあなたを愛していた。私たちは何もかも誤解していたのだ」と教えられたタンクレーディは、自分の悲願の成就を知り、末期の苦しみのなかアメナイーデに別れを告げて息絶える (N.18a レチタティーヴォとタンクレーディのカヴァティーナ・フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

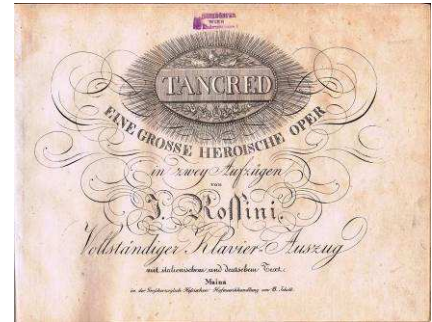
ミラーノのスカラ座の《試金石》、ヴェネツィアのサン・モイゼ劇場の《なりゆき泥棒》《ブルスキーノ氏》に続いて初演された《タンクレーディ》は、全集版が出版された 1984 年には契約に関するドキュメントが未発見のため、フェニーチェ劇場から新作を委嘱された時期や成立過程を詳らかにすることができなかった。しかし、その後ロッシーニの家族宛ての書簡が多数発見され、これをオークションで落札したロッシーニ財団が 2004 年に『書簡とドキュメント IIIa』¹として出版した結果、新たな事実が知られるに至った。以下、これに基づいて成立過程を再構成したい。

ロッシーニがフェニーチェ劇場 (Teatro La Fenice) ——1792 年 5 月 16 日にバイジェッロ作曲《アグリジェントの遊戯 (*I giuochi d'Agrigento*)》で開場したヴェネツィアを代表する劇場 (当時の名称はフェニーチェ大劇場 Gran Teatro La Fenice) ——の関係者から新作を打診されたのはデビューから 5 作目の《絹のはしご》をヴェネツィアのサン・モイゼ劇場で初演した 1812 年 5 月 9 日もしくはその少し前で、ロッシーニはこのファルサの成功を母アナに伝える書簡 (5 月 10 日付) に、「ぼくはラ・フェニーチェにオペラ・セーリアを書くための折衝をしました。たぶん明日、契約書を作ります」と記している²。そして 6 月 20 日の母宛の手紙で「ぼくはラ・フェニーチェの

契約書に署名しました。充分な金額が払われます」と報告した³。当時のフェニーチェ劇場興行師はフランチェスコ・カヴァッリ (Francesco Cavalli,?-?) で、彼はデビュー前のロッシーニと面識があったと考えられている。そしてこの手紙に「すぐミラーノに向けて出発します」とあり、これがスカラ座との契約に関係すると思われることから、ロッシーニは二つの大劇場からほぼ同時期に新作を委嘱されたと推測しうる。

続いてロッシーニは 6 月 30 日付と推測される母宛の書簡⁴に、「フェニーチェ大劇場 (Gran Teatro della Fenice) のための契約を結びました。歌手団はラ・マンフレディーニ、ラ・マラノッテとシポーニからなり、ロッシの書く良い台本を見てください」と記し、さらに「ネンチーニに、チェーラに秋季ではなく謝肉祭の契約書を持ってくるよう」伝言を頼んでいることから、サン・モイゼ劇場の興行師アントーニオ・チェーラとの新作契約がこの段階で正式に結ばれていなかった可能性がある——以上が、ロッシーニの母宛の書簡で明らかになった新事実である。

その後 9 月 26 日にスカラ座で《試金石》を初演して大成功を取めたロッシーニは、10 月末にヴェネツィアに移ってサン・モイゼ劇場のための新作に着手した。11 月 14 日付『ジオルナーレ・ディパルティメンターレ (Giornale dipartimentale)』は、次の謝肉祭期間にフェニーチェ劇場がロッシーニの新作オペラ・セーリアを予定し、台本作者がガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi,1774-1855) と報じたが、題名を挙げていない。ロッシーニは 11 月 24 日に《なりゆき泥棒》を初演した後もヴェネツィアにとどまり、サン・モイゼ劇場の次作《ブルスキーノ氏》(1813 年 1 月 27 日初演) とフェニーチェ劇場のための《タンクレーディ》を並行して作曲したと思われるが、その過程を詳らかにするドキュメントは現存しない。



《タンクレーディ》ピアノ伴奏譜のタイトル頁
(マインツ、ショット社、1817 年。筆者所蔵)

『ガゼッタ (Gazzetta)』にオペラ・セーリアの新作がロッシーニの《タンクレーディ》であると告知されたのは 1813 年 1 月 16 日⁵、《タンクレーディ》の初演が《ブルスキーノ氏》の 10 日後であることからロッシーニが二つの稽古のかけ持ちしたのは明らかで、これがサン・モイゼ劇場興行師チェーラとの軋轢の原因になったのだろう (《ブルスキーノ氏》は初日のみで上演を打ち切られ、以後ロッシーニは同劇場との関係を絶つ⁶)。

ロッシーニのデビュー作《結婚手形》(1810 年)の台本作者でもあったロッシは、原作をヴォルテールの『タンクレード (Tancredi)』(1759 年春執筆、1760 年 9 月 3 日パリのコメディ・フランセーズ初演)に求めた⁷。このヴォルテール台本はアゴスティアーノ・パラディージ (Agostino Paradisi,1736-83) のイタリア語訳 (1764 年出版) によって流布し、最初のオペラ化は、シルヴィオ・サヴェーリオ・バルビス (Silvio Saverio Balbis,1737-96) 台本/フェルディナンド・ベルトニ作曲 (Ferdinando Bertoni,1725-1813) の《タンクレーディ (Tancredi)》であった (1766 年 12 月 27 日トリノのレージョ劇場初演)。ちなみにこの段階で原作の悲劇的結末がハッピーエンドに改作されている。

続いてイグナーツ・ホルツバウアー (Ignaz Holzbauer,1711-83) 作曲《タンクレーディ (Tancredi)》(1783 年 1 月ミュンヘンの宮廷劇場初演。台本は前記バルビスのそれを使用)、ダヴィト・アウグスト・フォン・アペル (David August von Apell,1754-1832) 作曲《タンクレード (Tancredi)》(1790 年カッセル初演。台本作者不詳)、アレッサンドロ・ペーポリ (Alessandro Pepoli,1757-96) 台本/フランチェスコ・ガルディ (Francesco Gardi,1760c-1810) 作曲《タンクレーディ (Tancredi)》(1795 年 4 月 26 日ヴェネツィアのペーポリ私設劇場初演)、ルイーダ・ロマネッリ (Luigi Romanelli,1751-1839) 台本/ステーファノ・パヴェーシ (Stefano Pavesi,1779-1850) 作曲《タンクレーディ (Tancredi)》(1812 年 1 月 28 日ミラーノのスカラ座初演) が作られた。このうち原作の悲劇的結末を採用したのはペーポリ台本のみである。ロッシはおそらくバルビスとロマネッリの台本を知った上でロッシーニに新たな台本を提供した、と推測されている。

作曲経過を知るドキュメントは残されていないが、初演前にタンクレーディ役のマラノッテが登場のレチタティーヴォとカヴァティーナ (N.3 後出) に異を唱え、ロッシーニに差し替え曲を書かせたことが判っている (全集版 N.3a 〈待ち望んだ岸辺よ～愛の甘き言葉 (O sospirato lido~Dolci d'amore parole)〉)。1813 年 2 月 6 日の初演は 2 人の女性主役 (タンクレーディ役のマラノッテとアメナイーデ役のマンフレディーニ) の体調がすぐれなかったため、楽曲をカットした挙句に第 2 幕の途中で幕が下ろされてしまった (『ジオルナーレ・ディパルティメンターレ』同月 9 日付)⁸。全曲が上演されたのは、2 日目の公演となる 2 月 11 日であった¹⁰。

【特色】

ロッシーニ 10 作目の歌劇《タンクレーディ》は、彼の最初の傑作オペラ・セーリアと位置付けられる。それ以前には《デメトリオとポリービオ》の習作 (1810 年作曲、1812 年初演) と《バビロニアのチーロ》(1812 年) し

かないが、当時オペラ作曲家として認められるには大規模なオペラ・セーリアでの成功が不可欠だった。舞台がフェニーチェ劇場ということもあってロッシェニは意欲的に取り組み、名作と呼ぶにふさわしい作品を生み出すことになった。

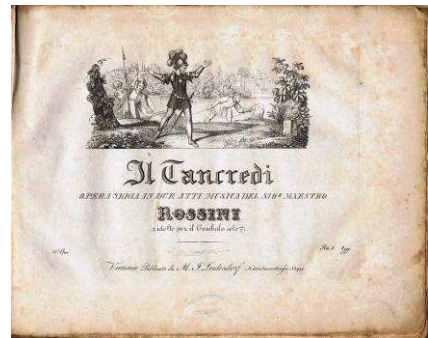
全編に美しい旋律の散りばめられたこのオペラは、ベルカントの装飾歌唱と初期のロッシェニの声楽書法の集大成といえる。タイトルロールの男装コントラルト（声域は $g\sim g''$ ）とその恋人のハイソプラノ（ $c'\sim c\#''$ ）による第 1 幕の二重唱〈あなたを取り巻く大気は (*L'aura che intorno spiri*)〉(N.5) と第 2 幕の二重唱〈ほっといてくれ：聞く耳は持たぬ (*Lasciami: non t'ascolto*)〉(N.14) は、若きロッシェニが作曲した最も魅力的な女声デュオとなっている。

タンクレーディのナンバーは登場のレチタティーヴォ〈おお、祖国よ！ (*Oh patria!*)〉とカヴァティーナ〈君はわが心を燃え上がらせ (*Tu che accendi questo core*)〉(N.3) が有名で、カバレッタに相当する〈ディ・タンティ・パルピティ (*Di tanti palpiti*)〉が人気歌謡として広く流布したことは、音楽新聞やスタンダールの証言、さらには多数の編曲作品が証明する¹¹。けれども評価すべきはその前奏と、アッコパニヤートのレチタティーヴォとカンタービレ部の見事な書式であろう。同役のアリアはフィナーレにも置かれているが (N.16-iv 〈さあ、何と言う？ どう答えるのだ？ (*Or che dici? or che rispondi?*)〉)、内容的には差し替え曲 (N.16-iiiia ロンド〈なぜ平安を乱すのか (*Perché turbar la calma*)〉)の方が充実している。後者のカバレッタ主題はロッシェニの旋律パターンの一つで、アメナイーデのカヴァティーナ (N.2) や《試金石》第 2 幕クラリーチェのアリアのカバレッタにも使われている。

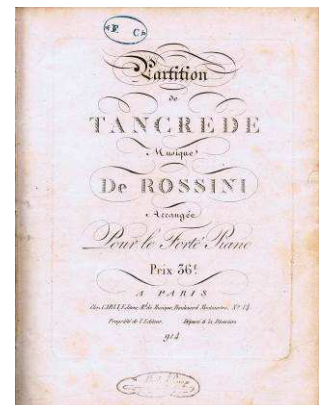
アメナイーデのナンバーにはロッシェニ初期の流麗なコロラトゥーラのスタイルが見出せ、とりわけ第 1 幕のカヴァティーナ〈なんと甘く、私の心に染み渡るのでしょ (Come dolce all'alma mia)〉(N.2) のカバレッタに顕著である。彼女には女性主役として豊かなナンバーが与えられ、N.10 の劇的なシェーナ〈私の不幸な人生の (*Di mia vita infelice*)〉も特筆に値する。唯一のテノール、アルジリオは各幕 1 曲のアリアを持つが、第 2 幕の〈ああ！ 署名しようとしてもできぬ (*Ah! Segnar invano io tento*)〉(N.8) が生彩を欠くのは初演歌手トドランの資質とも関係しよう。第 1 幕フィナーレはソリストと合唱における器楽的な扱いが斬新で、若きロッシェニの際立った才気が感じられる。

後述するように (上演史参照)、ロッシェニは続く四旬節期間のフェッラーラ再演のために悲劇的フィナーレへの改作を行った。ハッピーエンドと悲劇的結末の二つは近接して作曲され、どちらもこのオペラのオリジナル・ヴァージョンと理解しようが、嘆きの合唱〈勇者が死ぬ (*Muore il prode*)〉(N.17a) とタンクレーディの静謐なカヴァティーナ・フィナーレ〈アメナイーデ…持ち続けておくれ、お前の… (*Amenaide...serbami tua fé...*)〉(N.18a) が音楽的にも劇的にも優れ、現在はフェッラーラ版の上演が主流となっている。とはいえ初演版の第 2 幕フィナーレ〈この甘美なときめきの中 (*Fra quai soavi palpiti*)〉の爽やかな音楽も捨てがたい魅力を備え、1992 年シュヴェツィンゲン・フェスティヴァルのようにアンコールにこれを演奏する上演も行われる。その音楽はフェルディナンド・パエール (Ferdinando Paer, 1771-1839) 作曲《色事 (*L'intrigo amoroso*)》(ジョヴァンニ・ベルターティ台本。1795 年 12 月 4 日ヴェネツィアのサン・モイゼ劇場初演) のアリア〈ただ 15 分だけ (*Un solo quarto d'ora*)〉と酷似しており、ロッシェニがこれを模倣した可能性がある¹²。

旧作からの完全な転用は《試金石》から再使用した序曲 (シンフォニア) と、第 1 幕の合唱〈愛よ、降りてこい (*Amori scendente*)〉(N.6) のみである (原曲は《ひどい誤解》第 2 幕の冒頭合唱〈なぜ混乱しているのか (*Perchè sossopra*)〉)。《バビロニアのチーロ》第 2 幕の饗宴の合唱〈湯気の周囲に (*Intorno fumino*)〉にも使用)。他にも記憶から呼び覚まして使用した音楽があり、歌曲《粉屋の娘が望むなら (*Se il vuol la molinara*)》(1808 年以降) の旋律はロジエーロのアリア〈ついに微笑みながら戻ってきた (*Torni alfin ridente, e bella*)〉(N.15) の前奏と間奏に使われ、また第 1 幕の合唱〈そよ風は心地よく、穏やかに吹き (*Più dolci e placide*)〉(N.2) の冒頭合唱は《デメートリオとポリービオ》第 1 幕の合唱〈黙って行こう (*Andiamo taciti*)〉、第 2 幕タンクレーディのアリア (前記 N.16-iv) アンダンテの旋律は同じオペラの導入曲に起源を持つ。これは純然たる転用ではなく、音楽を導き出す糸口にかつて書いた旋律やモチーフを活用するロッシェニの作曲手法の一つと理解しよう。



全曲のチェンバロ独奏用編曲(ウィーン、ライデスドルフ社、1826 年頃。筆者所蔵)



《タンクレーディ》フランス初版譜 (パリ、カルリ社、1821 年頃。筆者所蔵)

【上演史】

前記のように 1813 年 2 月 6 日に行われた初演は不完全上演に終わり、2 日目 (2 月 11 日) に全曲が演奏された。当初の評判がいま一つだったことから、ロッシーニはシーズン中にナンバーのカットや差し替えを行ない、最終日の 3 月 6 日には歌手たちを称えて場内に花が撒かれ、鳩やカナリヤが放たれたという (3 月 9 日の新聞批評)¹³。

ほどなくロッシーニはマラノッテの愛人でプレーシャ貴族ルイーギ・レーキ (Luigi Lechi, 1786-1867) の助言とテキストによってヴォルテールの原作どおりの悲劇ヴァージョンを作曲、四旬節期間の 3 月 20 日にフェッラーラのコムナーレ劇場で上演した¹⁴。これは非常に重要かつ意義のある改作であるが、当時の聴衆に理解されず、すぐにお蔵入りとなった。3 月 27 日付『ジオルナーレ・ディパルティメンターレ・デッラドリアーティコ (*Giornale dipartimentale dell'Adriatico*)』は、「マラノッテ夫人の新たなシェーナとアリアはかなり喜ばれたが、導入されたタンクレーディの死はそうではなく、この地の観客の望むところではなかった」と報じている¹⁵。上演は 2 回で打ち切られ、悲劇的フィナーレ版は再び目の目をみることなく忘れ去られた (その自筆楽譜がレーキ伯爵の末裔によって保存されていることが判ったのは 1976 年)。続いて同年 12 月 18 日にミラーノのレ劇場 (テアトロ・レ) の開場作品として再演される際にも、ロッシーニはハッピーエンド版をベースに改作を施している¹⁶。

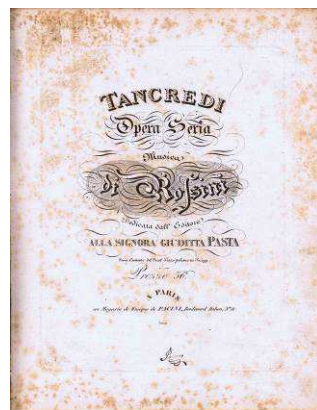
これ以後《タンクレーディ》は爆発的人気を博し、翌 1814 年だけでもジェノヴァ、モデナ、ボローニャ、ルーゴ、パドヴァ、フィレンツェ、ローマで上演された。国外では 1816 年 8 月のミュンヘンを皮きりに、ヴィーン (同年 12 月 17 日)、ダルムシュタット (12 月 26 日) で上演され、翌 1817 年にはシュトゥットガルト (2 月 20 日)、ブラハ (4 月)、バルセロナ (5 月 5 日)、サンクト・ペテルブルク (秋)、ストックホルム (10 月 25 日、第 1 幕のみ) と短期間にヨーロッパ中に流布し、パリ初演は 1822 年 4 月 23 日にイタリア劇場にてジュディッタ・パスタ主演で行われた。ちなみにイギリス初演は 1820 年 5 月 4 日にロンドンのキングズ劇場で行われ、アメリカ初演となる 1825 年 12 月 31 日ニューヨークのパーク劇場ではタイトルロールをマリーア・マリブランが歌った。1820 年代には南米も含めて世界の主要都市で上演された、そのピークは 1830 年で、以後急速に人気を失い、ロンドンでは 1858 年、ベルリンでは 1859 年、パリでは 1862 年を最後に演目から外れ、1871 年 10 月のドレスデンが 19 世紀最後の上演となった¹⁷。

20 世紀の復活上演は 1952 年 5 月 17 日にフィレンツェのペルゴラ劇場で行なわれ (フィレンツェ五月音楽祭。指揮: トゥッリオ・セラフィン、タンクレーディ: ジュリエッタ・シミアナート)、1968 年ペーザロ、1971 年ロンドン、1972 年サンダーランドと続いた。フェッラーラ版の蘇演は 1977 年 10 月 13 日にヒューストン・オペラがロッシーニ財団の第一次校訂譜を用いて行い (指揮: ニコラ・レシーニョ、タンクレーディ: マリリン・ホーン)、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでは 1982 年 8 月 27 日に初上演された (指揮: ジャンルイーギ・ジェルメッティ、タンクレーディ: ルチア・ヴァレンティーニ=テッラーニ)。日本初演は 2003 年 6 月にトリエステ・オペラ (ジュゼッペ・ヴェルディ歌劇場) の来日公演でなされた (初日は 6 月 1 日びわ湖ホール、同月 5 日と 7 日に東京 Bunkamura オーチャードホールでも上演。演出: マッシモ・ガスパロン、指揮: パオロ・アッリヴァーベニ、タンクレーディ: ダニエラ・バルチェッローナ)。2010 年 6 月には藤原歌劇団も上演している (演出: 松本重孝、指揮: アルベルト・ゼッダ、タンクレーディ: マリアンナ・ピッツォラート)。

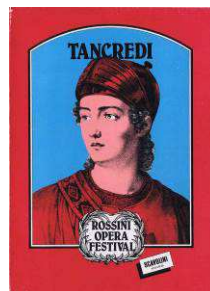
推薦ディスク

・ Denon COBO-6062 [国内盤 DVD] 2005 年 10 月フィレンツェ歌劇場ライブ (フェッラーラ版)

ピエール・ルイーギ・ピッツィ演出 リッカルド・フリッツァ指揮フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団 & 合唱団 ①ラウル・ヒメネス ②ダニエラ・バルチェッローナ ③マルコ・スポッティ ④ダリーナ・タコヴァ ⑤バルバラ・ディ・カストリ ⑥ニコラ・マルケジーニ



ジュディッタ・パスタに献呈された
全曲譜 (パリ、パシーニ社、
1822 年。筆者所蔵)



1982 年 ROF
プログラム (筆者所蔵)



・RCA Victor 09026-68349-2 [3CD] (1995年録音、96年発売。海外盤)

ロベルト・アッパード指揮 ミュンヘン放送管弦楽団 バイエルン放送合唱団 ①ラモン・ヴァルガス ②ヴァッセリーナ・カサロヴァ ③ハリー・ペータース ④エヴァ・メイ ⑤メリンダ・ポールセン ⑥ヴェロニカ・カンジェミ

註：フィナーレはフェッラーラ版とヴェネツィア版の双方を収録。付録に N.3a と N.10a も収められ、資料的価値が大きい。



- ¹ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004.
- ² Ibid., pp. 12-13. [書簡 IIIa.4]
- ³ Ibid., pp. 17-19. [書簡 IIIa.6]
- ⁴ Ibid., pp. 20-21. [書簡 IIIa.7]
- ⁵ 全集版《タンクレーディ》序文 p. XXII.
- ⁶ 詳しくは筆者による《ブルスキーノ氏》作品解説（日本ロッシェニ協会ホームページ掲載の改訂版）を参照されたい。
- ⁷ 物語はトルクワート・タッソ (Torquato Tasso, 1544-95) の叙事詩『解放されたイェルサレム (*Gerusalemme Liberata*)』(1575年完成、1580-81年出版)に起源を持つが、ヴォルテールはルドヴィーコ・アリオスト (Ludovico Ariosto, 1474-1533) の叙事詩『狂えるオルランド (*Orlando Furioso*)』(1516[-32]年) その他の文学作品からもヒントを得て、1759年4月から5月にかけての3週間で一気に書き上げたといわれる。
- ⁸ 日付はトリノのテアトロ・レージョ上演記録による。F. Stieger: *Opernlexikon* の「1786年12月26日」、全集版序文 p. XXII の「1767年」、*The New Grove Dictionary of Opera* [項目 Bertoni] の「12月26日」は誤り。
- ⁹ 全集版《タンクレーディ》序文 p. XXIV.
- ¹⁰ 全集版 p. XXIV が 2月9日付の新聞批評を基に最初の2回を不完全な上演としたのは誤り (2日目の公演は2月11日に行われた)。
- ¹¹ 詳しくは水谷彰良『ディ・タンティ・パルピティ——文学的・音楽的反響と転用について』（『ロッシニアーナ』創刊号、第2、4～6号に連載）を参照されたい。
- ¹² これについては『ロッシニアーナ』第31号 (2010年発行) の拙稿「ロッシニのボラッカとパエールのアリア——《タンクレーディ》フィナーレとパエール (ただ15分だけ)」及び日本ロッシニ協会ホームページ掲載の改訂版を参照されたい。
- ¹³ 全集版序文 p. XXVI に引用されているが、出典は記されていない。
- ¹⁴ 初演日は A cura di Marcello Conati, *Contributo per una cronologia delle rappresentazioni di opera di Gioachino Rossini avvenute in teatri italiani dal 1810 all'anno teatrale 1823*. (in *Atti dei convegni lincei 110, La recezione di Rossini ieri e oggi. Roma 18-20 febbraio 1993*, Accademia nazionale dei lincei, Roma, 1994., pp. 231-250) に基づく (その後の文献でも踏襲されている)。このフェッラーラ再演では第1幕の二重唱 (N.5) と第2幕のアルジェーリオのアリア (N.8) がカットされ、アメンナイデのカヴァティーナを新曲と差し替え (全集版 N.10a)、ナンバーの移動も行なわれた。
- ¹⁵ 全集版序文 p. XXVIII.
- ¹⁶ 差し替えナンバーは N.4a, 8a, 15a. として全集版《タンクレーディ》の Appendice IV に掲載。
- ¹⁷ 《タンクレーディ》の人気の比較早く失われたのは、ロッシニがナポリで作曲した改革的オペラ・セーリアの力強い作風を知った観客に旧弊で退屈な作品と思われたためであろう。そのことは1818年のサン・カルロ劇場上演の批評が、「あらゆるシーンに散見される眠気を催す致命的な部分を除去し、修辭学的な価値しかない長ったらしいレチタティーヴォを削除すればもっと美しい作品になっただろう」と述べたことでも判る (1818年4月15日付『両シチーリア新聞 (*Giornale delle Due Sicilie*)』。Giorgio Appolonia. *Le voci di Rossini*, Torino, Eda, 1992., p. 105. に短い引用あり)。